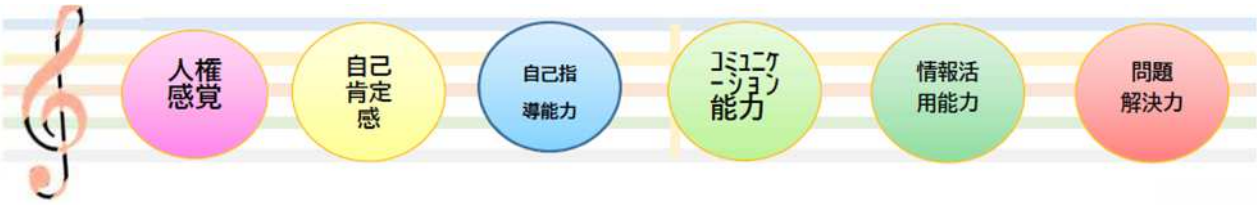
令和５年度　第７号
常磐野小学校　校長室だより
令和５年１２月１日発行　文責　清川　秀一

学校教育目標　つながり、深まり、未来をつくる子



早いもので今年も残すところあと１ヵ月となりました。メディアでも今年を振り返るような話題が出てきています。教育界においてもいくつか話題になったことがあるのですが、その一つに「生徒指導提要の改訂」があります。と言っても、学校関係以外の方にはあまりなじみがないと思います。「生徒指導提要」とは生徒指導に関する基本書で、理論や考え方、実際の指導方法等を、時代の変化に即してまとめたもので、１２年ぶりに改訂されました。その中で大事にされていることの一つに、児童に「自己決定の場を提供すること」があります。このことは学校だけにとどまらず、ご家庭においても子育てに取り入れていただけたらと思います。

２０１８年に行われたある研究によると、人間の幸福度に関係するのが、１位「健康」、２位「人間関係」でした。そして３位が「自己決定度（進学先や就職先を自分の意志でどれくらい決定したか）」という結果だったそうです。２０歳～７０歳までの２万人に調査した結果なので、信頼性が高いと思います。ほかに要因として上位に上がりそうなのは「収入」が考えられます。しかし「収入」が増えると幸福度の増える比率は下がる傾向らしいです。

また別の調査では、日本の子育てをタイプ分けしていて、①支援型②厳格型③迎合型④放任型⑤虐待型の５つに分類し、成人後の収入や学歴、健康などを調べた結果、①支援型が一番良い結果だったようです。⑤は論外かもしれませんが、③の迎合型の「子どもの好きなようにさせる」方法は、意外にも良い結果は生まれにくいようです。

調査から、児童を良い方へと導くためには、放任ではなく、強制でもなく、支援をしつつ、自己決定させることが最も良い方法であると考えます。生徒指導提要の中でも、「支える」「支援する」ことが謳われ、授業の中で自己決定できる場面を作ることが推奨されていることからも、常磐野小でも実践していきたいと考えています。具体的には「こうすればいいんだよ！」ではなく、「どうしたらよいと思う？」というように、答えを与えるのではなく、考えさせ、決めさせる問いかけです。ついつい教師はすぐに教えたくなってしまうので、気を付けていかなくてはいけません。日常生活の中でも、「そんなことして良いと言った？」「何度言ったらわかるの？」という自己決定を阻害するような言葉についても考えていくことが大切かと思います。学校と家庭が「支援」することで、児童のウェルビーイングに繋げられたらと思います。

（参考資料）世界に通用する子どもの育て方　　松村 亜里（著）　WAVE 出版